

アクティブ・ラーニング事例集

はじめに

(2017年4月)

○アクティブ・ラーニングとは

アクティブ・ラーニングについては、既に様々な図書が出版され、またネット上でも情報があふれている。若手の先生は大学の講義の多くが、アクティブ・ラーニングだった方も多いだろう。

ここでは、筆者と同じく、今まで講義中心の授業をなさっていた方に向けて、アクティブ・ラーニングとは何か、先進の著作によって共に考えていきたい。

アクティブ・ラーニングのイメージとして、グループを作って、討議をするなどの指導法を思い浮かべる方も多いだろう。しかし、アクティブ・ラーニングという言葉に注目して欲しい。ティーチングではなく、ラーニングなのである。学習者が「主体的・対話的で深い学び」を実現するための方法なのである。すなわち、討議のみならず、学習者がココロとアタマを大きく動かしながら学ぶ様々な活動を指していると考えられる。

○なぜ、今アクティブ・ラーニングなのか

それでは、なぜ今、アクティブ・ラーニングが注目されるのだろうか。

よく語られることであるが、21世紀の四半世紀が見えてきた現在、大きく社会構造が転換しつつある。かつての工業化社会では、工場で正確に同じ作業を行える能力が重視された。一斉授業はこのような社会人を育成するのに効果的であった。しかし、現在は、生徒の多くが使用しているスマートフォンによって、瞬時に大量の情報を得ることができる。かつて一斉授業で一気に生徒に伝えていた大量の知識自体は、スマートフォンで検索できてしまう。

一方、液状化する社会と見ることもできる21世紀は、20世紀に比べ、先行きが不透明で混迷化している。オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授とカール・ベネディクト・フライ研究員の『雇用の未来 コンピューター化によって仕事は失われるのか』では、今後10～20年で自動化され消滅する仕事が挙げられ、また、ロボットやコンピュータで代替できないため消滅しない仕事はクリエイティブな仕事であると述べられている。

このような社会に生きていく生徒たちは、知識や技術を習得するだけでなく、それを駆使して社会的な課題について考え、他者と共に判断し、問題に向かう力が必要となる。このような力を育てる方策がアクティブ・ラーニングなのである。

別の視点からも考えてみたい。筆者は小、中、高、予備校と一斉授業を受けてきた。大学でもゼミ以外には講義であった。特に教職教養はアクティブな姿勢で講義を受けなかったため、教員採用試験に際しては独習することになった。採用試験では共通一次試験対策で培った理数の力を、マークシート方式の一般常識試験に最大活用して公立高校に採用された。しかし、「社会科」の教員として、世界史のみを教えていると、かつて苦しんで覚え込んだ他教科・科目の知識はいつのまにかどこかに霧散してしまっている。一方で、筆者はMS-DOS時代からPCに親しみ、検索エンジンを使い込んでいる。忘れてしまっている、それに関わる検索語は必ず複数入力できるので、知りたい、思い出したい情報に素早くヒットできる。OPAC (Online Public Access Catalog) 検索も得意、生徒に素早く適切な図書を紹介できる。

もちろん、先生方には小学校以来の学習内容は漏れなく習得できており、いつでも活用可能な方もいらっしゃるだろう。しかし、教員以外の職に就いた場合にはどうなのだろうか。生徒がよりよい人生を送るために、また主体的に社会作りに参画するために、本当に育成すべき資質・能力は現在の一斉授業のみで育てることができるのだろうか。

ここで、平成27年8月に公表された文部科学省中央教育審議会「論点整理」に述べられた「育成すべき資質・能力」の3つの柱を掲げる。

- i) 「何を知っているか、何ができるか (個別の知識・技能)」
 - ii) 「知っていること・できることをどう使うか (思考力・判断力・表現力等)」
 - iii) 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか (学びに向かう力、人間性等)」
- (『教育課程企画特別部会 論点整理』 p.p.10～11, 平成27年8月26日, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm)

これらの資質・能力を育てるには、やはり、一斉授業のみでは厳しいであろう。

○アクティブ・ラーニングの方法とは

では、グループ学習や対話、討論を行えば、これらの資質・能力を育てるためのアクティブ・ラーニングになるかといえば、そうとは言い切れない。

すなわち、グループ学習を行っても、グループの作り方に配慮し、教員が適切にファシリテート (介

入)しなければ、「できる」生徒が「勝手に」学習を進める一方、ただ座っているだけで、全く興味関心をもてず、「面白くない」と感じる生徒が多々生じてしまうことは予想がつくであろう。このような状態の生徒を生じさせず、一人ひとりが現時点での個々の資質・能力に応じて集中して学習に取り組める授業を構築していく必要がある。

このように考えると、一般的なアクティブ・ラーニングのイメージからはほど遠いかもしれないが、個別に課題に向き合うのも、課題によっては十分、アクティブ・ラーニングとなりうる。「対話」の相手を、現在、目の前にいる人に限る必要はないからである。

○まずはどう取り組めばよいのか

アクティブ・ラーニングについて縷々述べてきた。アクティブ・ラーニングの方策を用いて授業を構築していくことが望ましいことも了解していただけたらだろうか。しかし、アクティブ・ラーニングが本格始動するのは、次期学習指導要領からである。焦る必要はない、今から、少しずつ、アクティブ・ラーニングを取り入れて、生徒のココロとアタマを大きく動かし、アクティブ・ラーナーとする授業を作っていけばよいのではなからうか。そのためには、まず、筆者を含め私たちが、アクティブ・ラーナーにならなくてはならない。

そして、筆者のようになりたてのアクティブ・ラーナーより先達の軌跡をたどるべきであろう。そして、先生方一人ひとりの個性、学校ごとの特色に適合し、その上で学習内容にそったアクティブ・ラーニングの方法を探っていけばよいのではないか。最後に簡単な解説と共に最低限の参考図書リストを掲げた。アクティブ・ラーニングへの入り口としていただきたい。

筆者は平成28年度の1年間、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れて授業を行った。アクティブ・ラーニングを取り入れる際、よく言われることであるが、いくつか注意点がある。まず、「教室は安心・安全の場」として、生徒に不安にさせないことが大変重要である。また、メタ認識をさせるために、振り返りをすべきである。評価については、生徒の相互評価を取り入れると効果的と言われるが、これもきちんと時間を確保しないと、効果半減になってしまう。

最後に。アクティブ・ラーニングの視点を持ち、高等学校のみならず、小学校、中学校での学びとの接続を考慮してカリキュラム・マネジメントに取り組めば、意外にもインクルーシブ教育も実現可能と

なってくる。アクティブ・ラーニングを用いれば、今まで取り残されていた生徒たちを一人ひとりを拾い上げ、それぞれの能力を伸張させることも可能である。

参考図書

①教育課程研究会編著『「アクティブ・ラーニング」を考える』東洋館出版社、2016

アクティブ・ラーニングの議論に関わる内容をまとめてある。「Chapter 1 『アクティブ・ラーニングとは』をめぐる」、Chapter 2 アクティブ・ラーニングを実現するために、「Chapter 3 アクティブ・ラーニングと各学校段階等・各教科等との関係」で構成されている。なぜ、アクティブ・ラーニングなのかを知るために読むべき図書。

②小林昭文『アクティブラーニング入門—アクティブラーニングが授業と生徒を変える—』産業能率大学出版部、2015

薄い、大きな文字、軽妙な書きぶりで読みやすく、「アクティブラーニング」の一つの方策がわかる入門書。①より先に読む方が良いかも知れない。1時間で読める。

③小川秀樹、峯下隆志、鈴木建生『この一冊でわかる！アクティブラーニング』PHP研究所、2016

「第1章 AL型授業を支える教育コーチング」、「第2章 授業・研修の実践事例」、「第3章 学習者の幸福を追求する授業実践」の3章で構成される。実践事例は11ケースあるが、社会科の事例はない。しかし、「本書の活用法」が掲載され、活用しやすい。

④ジョージ・ジェイコブズ、マイケル・パワー、ローワン・イン『先生のためのアイデアブック—共同学習の基本原則とテクニック』日本協同教育学会、2005

「第1章 協同学習を始めよう!」では、協同学習(グループ学習)を効果的に取り入れるための原則と技法を図解を多用して解説。「ジグソー法」などがよく分かる。「第2章 よくある質問」では協同学習についての様々な疑問とその回答が掲載されている。

⑤川島直、皆川雅樹『アクティブラーニングに導くKP法実践—教室で活用できる紙芝居プレゼンテーション法—』みくに出版、2016

KP法(紙芝居プレゼンテーション法)は、紙と黒板・ホワイトボードがあれば、どこでもいつでも始められるプレゼンテーション法であり、思考整理法である。第1章と第4章では、プレゼンテーション、コミュニケーションについての提言

やKP法を実践する上でのポイントとアドバイスがまとめられている。第2章では、専修大学付属高等学校でKP法を使って日本史を指導していた皆川雅樹氏が、KP法を用いたアクティブ・ラーニングについて授業実践紹介を含めて書いている。〈本書と関連するアクティブラーニングに関する書籍〉リストあり。第3章はKP法実践レポートで、世界史の実践例が2例挙げられている。

⑥ **キャリア・ロブマン、マシュー・ルンドクウスト『インプロをすべての教室へ 学びを革新する即興ゲーム・ガイド』新曜社、2016**

グループ学習をスムーズに進めるためには、アイス・ブレイクが重要。生徒が打ち解けて、安心できる空間ができてこそ、創造的な学びが始まる。

高校でも活用できるインプロゲームが掲載されている。

⑦ **ダン・ロスステイン、ルース・サンタナ、吉田新一郎訳『たった一つを変えるだけ—クラスも教師も自立する「質問づくり」—』新評論、2015**

表紙をめくると、「教師に指示されているかぎり、僕らは何も学んでいない」とある。衝撃的である。

「教師の発問」から「生徒自身による質問づくり」への転換を提案している。そして、生徒が質問を作る技能を身につける方法を紹介している。画期的内容であるが、日本語訳が読みにくい。社会科の質問作りの事例あり。

本 事 例 集 の 使 い 方

*本事例集は、『高等学校 世界史A 新訂版』(35 清水・世A 313) に準拠しています。

世A 313 準拠 AL 事例集

アクティブ・ラーニング事例集
中国王朝の変遷

教科書の関連項目
テーマ1～3・5～7

1 学習目標 (1) 中国王朝の変遷や周辺民族との関係を勢力図を利用して視覚的に考察する。
(2) 既習事項である中国史の知識を活用することができる。
(3) 個別の王朝の動きのみならず中国史全体を俯瞰する視点をもつ。

2 授業の展開

事前準備 1 分
グループ分けをおこなう(3～5名)。

2分

活動1 中国王朝の勢力図を時代ごとに並べ替えてみよう
21分

①中国王朝の勢力図のコピーと貼付用の台紙を各グループに配布する。(1分)
・使用する図は、教科書 p.16 (前漢)・p.18 (唐)・p.20 (南宋)・p.27 (元)・p.28 (明)・p.30 (清) の6種。図には、王朝のみを消去してランダムに番号を振っておく。②で2回貼付するため、図1枚につき2枚ずつ配布する。
③各グループで勢力図を時系列順に並べ替え、台紙に貼付させる。(20分)

④台紙は無地のA3用紙(②の発表の際にクラス全体に明示するため)。
図は6種すべてが台紙に貼付できるサイズにするとよい。

⑤各朝国定図をおこない、並べ替える明確な理由を考えさせるように指導する。地図上の

① **学習目標** この授業を通して生徒が「何ができるようになるか」を重視し、(1)思考・判断の目標(主に「…について考察する」)、(2)知識・技能の目標(主に「…の知識を活用する」)、(3)テーマに関する世界史固有の見方・考え方(視点・方法)の目標の3点を挙げました。

② **授業の展開** 実際の授業の展開に沿った指導案を掲載しました。適宜、指導上の留意点も示しました。

③ **授業のために** 指導案の背景として想定した生徒観・授業時間などを示すとともに、指導案・テーマ・評価などに関する解説を掲載しました。

④ **ワークシート** 「授業の展開」に付属するワークシートです。生徒にもそのまま配布できるようになっています。

⑤ **自己評価項目** ワークシートの末尾に設置し、生徒が授業のまとめとして自己評価を行うことができるようになっています。評価項目は、①学びに向かう態度、②知識・技能、③思考・判断・表現の3つの観点を想定しました。

世A 313 準拠 AL 事例集

3 授業のために

■ 想定した生徒観

- ・学習態度: 前近代の中国史関連項目をすべて学習済みであること。
- ・生徒観: 高等学校第1学年(文理未選択・全員履修)・高等学校第2学年(理系選択者)を想定。世界史を初めて学習している状態を想定している。
- ・グループ人数の基準: 3～5名、最大6グループが理想(授業の展開を参照)。
- ・1コマあたりの時間: 50分。

■ 「授業の展開」解説

■ テーマについて 本教科書は、学習内容の最初に中国史を扱う。高校世界史を初めて学習する生徒にとって、中学歴史や高校日本史でも扱う中国史は、世界史の中で最も興味を持ちやすい領域である。

生徒が気づくようなアドバイスが教員に求められる。例として、朝土の大きさ、王朝の首都や北方民族の名称、日本の状況などがある。

発表後に教科書を使用して正確な並べ替えをおこなう際には、グループの考えた順序と正しい順序を比較させて、間違えた点を考察させたい。例えば、前漢と唐のように勢力図が似ている場合は、周辺諸民族との関係や首都などの比較が最も有効である。また、並べ替えの正答を得点化してゲームのようにするの1つの手段であろう。

③の①・②を踏まえて、グループごとに割り当てられた王朝について教科書を使用して調査する。割り当てる理由は、一つに絞ることでもって集中して調べることができるからである。教科書に書かれている内容を基準とするが、それ以外の内容も積極的に取り上げようとする。特に、北方諸民族は中国史とは深い関係にあるため、重要である。

前漢→唐→中国王朝が優勢、南宋→諸民族が優勢、明→格闘、元・清→異民族王朝(征服王朝)という順序で並べ替えたい点である。

4 ワークシート

中国王朝の変遷

年 組 番 (氏名)

中国王朝の勢力図を時代ごとに並べ替えてみよう

グループの解答

→ → → → →

5

自己評価項目	評価
グループワークに積極的に参加できたか。	
既習事項を自身の知識として課題の検討に活用することができたか。	
グループワークを通じて、中国王朝の変遷をさらに深く考察できたか。	

〈評価基準〉A = よくできた B = できた C = あまりできなかった D = まったくできなかった